中国現代文学選集 7 抗戦期文学集 I 竹内 好編

奴隷となった母親　柔石　松井博光訳

多事の秋　丁玲　高畠穣訳

艾蕪　竹内 好訳

の物語　蕭紅　立間祥介訳

平凡社

中国現代文学選集
全20巻

呼蘭河の物語　他　　第8回配本・第7巻

昭和37年9月5日　発行　©

定価 450 円

訳者代表　竹内好（たけうち よしみ）

訳者との申合せにより校印を省略します

東京都千代田区四番町4番地
発行者　下中邦彦

東京都板橋区志村町1丁目1番地
印刷者　川上胖

発行所　東京都千代田区四番町4番地 振替・東京29639　株式会社 平凡社

落丁，乱丁本はお取替えいたします

印刷　東洋印刷株式会社
製本　石津製本所

目　次

奴隷となった母親（柔　石）……三
水（丁　玲）……三
多事の秋（丁　玲）……五七
霞村にいた時（丁　玲）……八五
小さな心（魯　彦）……一〇五

山峡中（艾　燕）……一三
夜哨線（葉　紫）……一三七
茶館にて（沙　汀）……一五五
羊（蕭　軍）……一七一
呼蘭河の物語（蕭　紅）……一九九
解　説……三五五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 奴隷となった母親

柔石作
松井博光訳

彼女の夫は皮革行商人である。村々の猟師から獣皮や牛皮を買い集め、都会へ運んで売りさばく。だが時には、いくらか百姓仕事もやった。芒種（節季のひとつ、六月初旬）のころには、よその田植えを手伝った。彼が植えつける苗の列はいつも真っ直ぐだったので、たとえば五人でいっしょに田植えするときなど、決まって彼を先頭に立てて基準にした。けれども境遇はよくなることとてなく、借金は年々かさむ一方だった。おそらく境遇がよくなかったためだろう、彼はアヘンも吸えば、酒も飲み、かけごとまでやるようになった。そして、ついに彼は、全く乱暴な荒らくれ男になってしまった。そればかりか、ますます貧しくなって、ついに僅かな借金さえ、誰もひき受け手がなくなった。

食いつめた結果、病気になり、全身土色になった。顔は小さな銅鼓のように黄色、白眼さえ黄色くなった。ひとは黄疸だといい、子どもらは彼を「黄色いデブ」（黄疸の俗称）と呼んだ。ある日、彼は妻にいった。

「もうどうにもならない。このままでは、鍋まで売ることになる。おれは思うのだが、やっぱりおまえのからだでやりくりするほかはない。おまえ、おれといっしょにひもじい思いをしていて何になる」

「わたしのからだで？……」

妻はかまどのうしろに腰をおろし、懐に彼女の満三つになったばかりの男の子を抱いていた――子どもはまだ乳を吸っていた――彼女はおずおずと小声できき返した。

「おまえの、そうさ」夫の、病後の弱々しい声、「おれはもう、おまえをひとに貸すことに決めた……」

「何だって！」

妻は卒倒せんばかりだった。

屋内はしばらくひっそりとした。彼はあえぎあえぎいった。

「三日前、王狼（ワンラン）がやって来て、くどくど借金の催促をして帰ったあと、おれもすぐ家を出て、九畝潭（チウムーターン）のほとりへ行った。おれはもう生きていられないと思った。はい登って身を投げればちょうど沼に落ちそうなあの木の根もとに腰を下ろして、あれこれ考えたが、どうにも跳びこむ元気はなかった。みみずくが耳もとで鳴き続けてな、おれは心底からぞっとした。仕方なしにおれはひき返した。その途中沈（シェン）婆さんに出くわした。こんなにおそく、表で何してると婆さんがきくから、おれは話した。おれのためにひとつ借金してもらえまい

か、あるいはどこかのお嬢さんから着物か首飾を借りて来て、しばらく質に入れてはくれまいか。王狼の狼みてえな黒眼が、しょっちゅう家のなかできらきらしてるってことがもうなくなるように、とな。だが婆さん、笑いながらいったものよ。

『おまえさん、まだかみさんを養っとるじゃないか？　おまえさんがこんなに黄色くなっちまったってのにさ』

おれがうなだれて何も答えないでいると、ことばを続けた。

『息子を、というても、おまえさんには一粒種だから、手放せまい。だがかみさんなら――』

おれはそのとき思った。おれに妻を売れというのか、とな。婆さんはいい続けたさ。

『だがかみさんは――まげをゆった（正式の妻になったの意）とはいうても、食いつめちまったのでは、もう仕方がない。それでもまだ養っとく気かい？』

そして婆さん、いきなりきりだした。

『ひとり秀才（シウツァイ）（官吏の有資格者で上層の身分）がおってな、子どもがなくて、齢がもう五十になるので、妾を買いたいのだが、奥さんが許さない。買うのでなく借りるのならいいという。そこで三年か五年の年期で借りようということになって、わしに適当な女子を物色せいというわけだ。年頃は三十くらい、二、三人子どもを生んだ女で、おとなしくてまじめでなければいけない。それに仕事に精を出し、おまけに奥さんには頭を下げること、ちゅうのじゃ。秀才の奥さんの話では、条件がかなってさえおれば、八十元か百元出してもいい、ということじゃった。わしはもう何日も探しとるが、どうにもぴったりの女子が見つからなんだ』

婆さん、おれに出会ったいま、おまえのことを思い出したが、何から何まで申し分なしだというのだ。その場で、おれの考えを聞きたいという。おれは涙を流しながらも、とうとういいくるめられて、うんと返事をしてしまったのよ」

そこまでいって、彼はうなだれた。声もかすかになり、そしてとぎれた。妻は、まるきりものにつかれたように、ひとことも口をきかなかった。しばらくひっそりしていたが、彼が話を続けた。

「昨日、沈婆さんが秀才の家へ行ったところ、秀才は話を聞いて上気嫌、奥さんも喜んで、金は百元だそう、年期は、もし三年で子どもができなかったら、五年にしよう、というのだそうだ。婆さんは日どりまで決めて来た――今月の十八日、五日後だ。今日、婆さんが契約書を作りに行ってる」

そのとき妻は、全く臓腑までふるえだし、おろおろ声をだした。

「あんた、なぜ早くいってくれなかったの？」

「昨日おまえの前を三度も行ったり来たりしたが、おれはとうとういいだせなかった。しかしよく考えてみれば、おまえのからだで何とかするほか、もうどうしようもない」

「決めちまったの？」
　妻は歯をがちがちいわせながら、尋ねた。
「あとは契約書だけだ」
「とんでもないことだよ、わたし！　本当にもうどうにもならないの？　春宝（チュンバオ）の父さんよ！」
　春宝とは、彼女の懐にいる子どもの名だった。
「とんでもない、ってことはおれも考えたさ。でも食いつめちまったのだし、おれたちが死にたくないのなら、どうしようもねえだろ。今年は、田植えもできないかもしれない」
「あんた、春宝のことを考えなかったの？　春宝はまだ五つなんだよ。母親がいなくていいものかね？」
「おれが預かりゃいいだろ。もう乳離れした子だ」
　彼は少しずつ腹を立てて来たらしく、プイと表へでて行った。彼女は、そこでおいおい泣きだした。
　そのとき彼女は、過去の思い出のなかから、ちょうど一年前のことを思い出していた。彼女は女の子を生んで、まるで死んだように寝床に横たわっていた。死とは、何もかも全てのはずなのに、彼女は手足がばらばらのような感じだった。生まれ落ちたばかりの女の子は、床の乾草の山でオギャーオギャーと泣いていた。声は甲高く、手足をぎゅっと縮めていた。臍帯がからだにまといつき、胎盤が、かたわらに落ちていた。彼女は、何とか起きあがって赤ん坊を洗ってやりたいと思ったが、頭を起こしても、からだの方は寝床にへばりついたままだった。そこで彼女は夫の方を見た。この荒くれ男は顔に赤みを浮かべ、煮え湯のはいった桶を下げて女の子のかたわらに近寄った。彼女は、まさに最後の力をふりしぼって彼に呼びかけた。
「待って、待って……」
　だが、病気前の兇暴そのものだったこの男は、一分間の相談の余地も与えず、ものもいわばこそ、「オギャーオギャー」と甲高く泣く女の子、生まれでたばかりの新生命を、屠殺人が殺すべき小羊を抱きあげるように、その粗暴な両腕に抱きかかえ、ポトンと煮え湯のなかへ投げこんだ。煮え湯のはねる音と皮肉が煮え湯を吸いこむジージーいう音のほか、女の子はひとことも声を出さなかった。――彼女はいぶかしく思った。なぜまた甲高く、泣き声をひと声もあげないのか？　こんなにもひっそり、むざむざ死んでしまって平気なのだろうか？　ああ！――それは、彼女の方がそのとき気を失ったせいなのだ、と思い直してみた。心をえぐられたように、彼女は気を失ったのだった。
　そこまで思いめぐらすと、涙ももはやかれ尽きたようだった。
「ああ、つらい！」
　彼女はそっとひとつため息をついた。そのとき、春宝が乳首を離し、母親の顔を見あげて呼んだ。
「母ちゃん、母ちゃん！」

家をあとにする前の晩、彼女は部屋のいちばん暗いところに腰を下ろしていた。ランプがひとつ、かまどの前に螢の光のような火をともしていた。彼女は春宝を抱き、顔を子どもの髪におしつけていた。思いははるか彼方をさまよっているようだった。だが自分にも、どれほど遠くをさまよっているものか、見当もつかないのだった。そして、そろそろと意識がよみがえり、現実にまで、子どものことにまでたちもどって来た。彼女はそっと子どもに声をかけた。

「春宝、春宝！」

「母ちゃん」子どもは、乳首を口に含んだまま答えた。

「母ちゃんはあしたでて行くんだよ……」

「うん？」

子どもはわけがわからぬらしく、本能的に頭を母親の懐にもぐりこませた。

「母ちゃんは帰って来ないの。三年間は帰れないのだよ！」

彼女は目をこすり、子どもは乳首を離してきいた。

「母ちゃんどこへ行くの？　お寺？」

「そうじゃない。三十里もむこうの李という家」

「おらも行く」

「春宝は行けないの」

「いやだ！」

子どもは逆らうように、再び多くはない乳を吸い続けた。

「おまえは父ちゃんと家にいるの。父ちゃんがおまえを見てくれるからね。いっしょに寝てくれるし、遊びに連れてってくれる。父ちゃんのいうことをよくきくんだよ。三年たったら……」

そのことばが終らぬうちに、子どもが泣きだしそうにいった。

「父ちゃんは、おらをぶつよ！」

「父ちゃんはもうぶたないよ」

同時に彼女は、左手で子どもの右の額を撫でていた。父親が、生まれたばかりの妹を殺した三日後、すきの柄で殴ったためにできた傷跡がそこにあった。

彼女はもっと子どもにいい聞かせたいらしかったが、そこへ夫が戸口をはいって来た。彼は彼女の前で、片手をポケットにつっこみ、何やらつかみ出しながらいった。

「金はもう七十元手にはいった。あと三十元は、おまえがむこうへ行ってから十日後にくれる」

ひとやすみして、いった。

「迎えのかごをよこしてくれるそうだ」

もうひとやすみして、

「かごかきは、朝早く飯をすまし次第、来てくれるそうだ」

それだけいうと、彼は彼女のそばを離れて外へでて行った。

その夜、彼女と夫はともに晩飯を食べなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

翌日は春雨がシトシト降っていた。

かごは、夜明けとともにやって来た。

しかしこの女は、ひと晩じゅう、一睡もしなかった。彼女はまず、春宝の二、三着の古着につぎを当てた。春は過ぎ夏が来ようとしていたのに、彼女は子どもの冬用のボロボロになった綿入れまでもちだして、父親にひき渡した――とはいえ、彼はもう寝床で眠っていたのだが。それから彼女は、夫の横に坐り直し、ちょっと話をしたいと思った。だが、長い夜がのろのろと過ぎて行くばかりで、ひとことことばは口をでなかった。そして、彼女が思いきってふたことみこと声をかけたとき、口をついて出たのはよく聞きとれぬ声ばかりで、その声は彼の耳にとどかなかった。それから彼女は横になって、もう口をきかなかった。

意識がぼやけてうとうとしはじめたとき、春宝が目を覚ました。春宝は母親をゆり動かして起こした。彼女が春宝に着物を着せてやったとき、彼女は春宝にいった。

「春宝や。うちでおとなしくしているのだよ。泣いちゃいけない。泣かなければ、父ちゃんはぶちゃしない。そのうち母ちゃんが、お菓子を買って来てやるから、おまえ、泣くんじゃないよ」

悲哀とはどんなものか、子どもが知るはずもない。口を大きく開けて「アー、アー」とうたいはじめた。彼女は春宝の唇に口づけしてやって、いった。

「うたはやめて。父ちゃんが目を覚ますじゃないか」

かごかきが、戸口の腰かけに腰を下ろし、きせるでタバコをふかしながら、勝手な話に興じていた。間もなく、隣村の沈（シェン）婆さんもやって来た。老婆は、この世故にたけた口入れ婆は、戸口をはいるなり、からだから雨しずくを払って、彼らに声をかけた。

「雨じゃ、雨じゃ。こりゃあんた方の家が、この先うるおうちゅう兆じゃて」

婆さんはせわしげに屋内を行ったり来たりしたあげく、子どもの父親に話しかけた。礼金の催促だった。なぜなら、この契約がこんなにうまい具合に運び、しかもひき合うようになったのは、全く彼女の腕があったればこそだというのだ。

「実際の話、春宝の父ちゃんよ。あと五十元たしゃ、あの旦那は妾をかこえるんじゃ」

それから矛先（ほこ）を転じて、彼女をせきたてた――女は春宝を抱いたまま、そのとき、身じろぎもせずに坐っていた。婆さんは声をはりあげた。

「かごかきがむこうへ行ってから昼飯にするんじゃ。あんた、早く支度しなよ」

しかし女は、ちらっと婆さんに目をやっただけだった。

「わたしは本当にでて行きたくない。ここで餓え死にさせとくれ！」とでもいうように。

それは、喉を声になってではしなかったが、やり手婆にはよくわかった。すぐ前に近よると、婆さんは目を細めて笑いながら、いった。

「あんたは本当にねんねだねえ。『黄色いデブ』があんたに何してくれる？　あちらさんは本当に何もかもあり余ってるお邸じゃ。土地も二百ムー以上あるし、暮し向きもゆったりしたものさ。家も自分のもの、雇い人もいれば、牛も飼うとる。奥さんは気だてのいい人で、親切なもんさ。ひとが来さえすりゃ、いつでも何か食べものをくれなさる。旦那はな——実際は年をとってやせん。顔は白いし、ひげを生やしてもいない。本を読みなさるから、ちいと猫背じゃあるが、おっとりしたものよ。まあ、くどくどいうこともないわ。あんたがかごを下りて見さえすりゃ、わかるってこと。わしは、うそをついたことのない仲立ちじゃて」

女は涙を拭って、かぼそい声でいった。

「春宝……わたしがどうして春宝を手放せるね！」

「春宝のことはおいときな」婆さんは、彼女の肩に手をやり、彼女と春宝に顔を近づけた。「もう五つだろ。昔の人がいうとる『三つ四つになれば、母親のもとを離れる』とな。手放しても大丈夫。あんたが腹をしっかりさせて、むこうで一人か二人赤ちゃんをこしらえれば、万事まるく収まる」

かごかきも戸口で腰を浮かし、ぶつぶついった。

「はじめて嫁にいくんじゃあるまいに、おいおい泣いて」

そこで婆さんは、春宝を彼女の懐から抱きとりながら、いった。

「春宝はわしにまかしときな」

幼い子どもは泣きだし、手足をばたつかせた。だが婆さんは、とうとう子どもを木戸の外へ連れだした。女がかごの前まで行ったとき、彼女はかごかきにいった。

「なかへ連れてはいっとくれ。表は雨が降ってる」

夫は頬杖ついたまま、ぴくりともせず、口もきかなかった。

両村は三十里（約十七キロ）離れていた。だがかごかきが次にかごを下ろしたとき、もう着いていた。春の小糠雨が、かごの布覆いのなかへ舞いこみ、彼女の着物を濡らした。顔のまるまるとした、ぬけめなさそうな眼の五十四、五歳と見える老婦人が彼女を出迎えた。これが奥さんに違いない、と彼女は思ったが、ちらっと恥ずかしげに見やっただけで、あいさつはしなかった。老婦人がいかにも親しげに彼女を石段へ導いたとき、ひょろひょろと背の高い、瓜実顔の男がでて来た。新来の若い婦人をしげしげと見つめてから、顔を笑いにほころばせて、声をかけた。

「ずいぶん早く着いたな。それにしても着物が濡れたね」

だが老婦人は、彼のいうことにお構いなく、彼女に問いかけた。

「まだ何か、かごのなかにあって？」

「何もありません」若婦人は答えた。

近所の女が数人、表門の外から、首をつきだしてのぞいていたが、彼らはかまわずなかへはいってしまった。

自分でも一体なぜかわからなかったが、彼女はしきりに前の家のことが気になり、春宝のことが胸を去らなかった。うそでない、かつ明らかなことは、これからはじまる三年間の生活を、彼女が祝福すべきだということだった――この家庭と、彼女が貸し与えられた夫とは、ともに過去よりよいに違いない。秀才は確かにやさしくおとなしい人間だし、話声もあんなに小さい。奥さんも実際予想外の婦人だった。態度の丁重なこと、いつまでも続く話。夫との今までの生活のこと、美しい豊かな結婚生活から今に至る三十年間のことを彼女は話した。彼女は一度お産したことがあった。十五、六年も前のことで、男の子だった。彼女の話だと、このうえなくかわいらしく、このうえなく賢い赤ちゃんだったが、十カ月にもならぬうちに天然痘を患って死んだ。それ以後二度と子どもができなかった。彼女の心づもりではどうやら――どうやら早く夫に妾を囲わせたかったらしい。しかし彼は、彼女を愛していたためか、それとも適当な相手がいなかったせいか――この点に関して彼女ははっきりしたことをいわなかったが、ともかくそのまま今日になった、という。この話は、素朴な心の持主である若婦人を、悲しませ、苦しめ、時にはほっとさせ、また胸をふさがせた。最後に老婦人は、彼女への希望をうちあけた。若婦人は顔を赤くした。

「あんたは三、四人子どもを生んだことがあるのだから、むろんのこと、よく知ってなさる。きっとわたしよりいろいろとわかってなさるだろうね」

そう彼女はいって立ち去った。

その夜、秀才が家のなかのあれこれを彼女に教えた。だが実際のところ、彼女に自慢しあるいは媚を求めたに過ぎなかった。彼女はたんすの横に腰を下ろしていた。こんなに赤い木のたんすは、前の家にはなかった。彼女はぼんやりそれを見つめていた。秀才はたんすの前に腰を下ろして、彼女に尋ねた。

「おまえは何という名だね？」

彼女は答えもせず、にこりともせず、立ちあがって寝床の前へ行った。秀才はそのあとを追って寝床のそばへ行き、にっこりしながらいった。

「恥ずかしいのか？　ハハー、おまえは夫のことを考えてるな。ハッハッ、いまはわたしがおまえの夫だ」声は低く、そのうえ彼女の袖を引張った。「悲しがることはない！　おまえ、子どものことも考えてるね、そうだろ？　しかし――」

彼はいいさしたまま、ハッハッと笑い、自分から羽織っていたガウンをぬいだ。

彼女は、奥さんが大声で誰かを叱る声を部屋の外に聞いた。誰を叱るのか、ちょっとわからなかった。飯炊きの下女

が叱られているにしても、まるで自分が叱られているような気がした。胸の悲しみ故に、それが自分に浴びせられたように思われたのだ。秀才が寝床から声をかけた。

「おやすみ。あれはしょっちゅうがみがみいうとる。あれは以前うちの作男を好いとったのだが、作男が飯炊きの黄媽(ホアンマー)とあんまり口をきくものだから、いつも黄媽を叱る」

ときは日一日と過ぎた。前の家のことは、次第に彼女の頭から遠のき、眼前のことが一歩一歩彼女に身近となり、彼女をなじませた。とはいえ、時として春宝の泣声が耳もとに聞こえ、また何度となく夢で春宝と出会った。だが夢は次第にあいまいとなり、眼前の仕事が日一日とわずらわしさを増した。彼女は、老婦人が疑ぐり深いことを知った。表面では彼女に対して大まかな方だが、彼女の嫉妬心は探偵さながら、彼女に対する秀才の一挙一動を監視していた。

秀才が外から帰って来たとき、最初に若婦人と会って話をしたりすると、老婦人は、何か特別なものを彼女に買い与えたのではないかと疑い、その晩は、秀才を自分の部屋に呼びつけて、頭ごなしにこごとをいわなければ気がすまないのだった。

「あなたは狐に惑わされたのですか?」

「あなたは、自分がどれほど老いぼれたか、ひとつよく考えてごらんになるがいい!」

そんなことばが、一度ならず彼女の耳にはいった。そうしたことがあってからというもの、秀才が外から帰って来たとき、近くに老婦人が見えないと、彼女は大いそぎで隠れなければならなかった。老婦人が近くにいたとしても、時にはやはりその場をはずさねばならなかったし、できるかぎり自然に振舞って、そうした素振りをはたの人に気どられないようにしなければならなかった。さもないと、老婦人が彼女に腹を立てて、他人の面前でわざと奥さんの面汚しをするつもりか、というだろう。

その後、家のなかのいろいろな雑務が彼女の身にふりかかり、彼女は下女同然のありさまとなった。だが彼女は、ともかく賢い方だった。ときには老婦人のぬぎっ放しの着がえを洗ってやったりした。

「わたしの着物をなぜあんたが洗うの? あんた自分の着物だって黄媽に洗わしたらいいのよ」

老婦人はそういうものの、また続けていうのだった。

「あんた、豚小屋へ行ってみるといいわ。あの二匹の豚がなぜあんなに騒いでるのか。腹をすかしてるんじゃないかしら。黄媽ったら、いつも餌を十分やらないんだから」

八カ月たった。その年の冬、彼女の胃が変調をきたした。どうにもご飯がいやで、新鮮なうどんやさつまいものようなものが食べたかった。だが、さつまいもやうどんが、二度も続くと、もう食べる気がしなくなって、わんたんがほしく

なり、食べすぎては吐くのだった。そのうえまた南瓜や梅の実が食べたくなった――といっても、それらは六月のものだから、今の季節にはめったに手にはいらない。秀才はこの変調がもたらす予告を知っていた。彼は終日にこにこしながら、手にはいるかぎり何でも、せっせと彼女に見つけて来てやった。自分から町へみかんを買いに行きもしたし、人に頼んで金柑を買って来てもらいもした。彼は廊下を行ったり来たりしながら、口のなかで何やらつぶやいた。彼女と黄媽が正月用の粉ひきをしているところを見つけたとき、まだ三升もひいてないのに、彼は彼女にいった。

「ひと息いれなさい。作男だって粉はひける。年糕（メリケン粉で作る正月用の菓子）は誰もが口にするのだからな」

時には夜、人びとが談笑しているのに、彼ひとりランプをもち出し、ランプの下で、『詩経』（中国最古の詩集）を読み出す。

「関関たる雎鳩は　河の洲にあり
窈窕たる淑女は　君子の好逑、
……」

そのとき、作男が彼に尋ねた。

「先生。あなたはもうこのうえ試験を受けなさるわけでもないに、なぜまた本を読んだりしなさるんで？」

彼はひげのない口のまわりをひと撫でして、にこやかに答えた。

「そう。おまえ、人生の快楽ということを知っとるか？　いわゆる『洞房花燭の夜、金榜挂名の時』（前者は初夜、後者は官吏試験に及第した時をいう）という二句の意味を知っとるかな？　この二つは人生最大の快楽だ！　しかし、わたしは両方とも経験してしもうたが。それ以上に愉快なことが、わたしにはあるのだよ！」

このことばに、二人の妻を除いた他の人びとがみな笑いだした。

こうしたことが、老婦人には実に不愉快だった。彼女も、はじめ若婦人の身ごもりを知ったときは喜んだ。だがその後秀才が彼女をそんなにもちあげるのを目にして、彼女は自分の腹が借りを返せないことをうらんだ。

次の年の三月のこと、若婦人は気分が悪くなり、頭も痛むので、三日ばかり寝こんだことがあった。秀才は彼女を休養させたがり、そのうえたえず何がほしいか、と彼女に尋ねた。老婦人は心底から腹を立てた。老婦人は、彼女が甘えているのだといい、三日間ぶつぶついい続けた。まず意地悪く嘲笑した。秀才の家へ来たと思ったら、もうお偉くなっちまって、腹が痛いの頭が痛いのと、まるで正式のお妾さんの振舞いだ。自分の家で、そんなに甘やかされていたなんて考えられない。きっと通りをうろつく雌犬みたいに、腹に何匹も子

犬をみごもっていながら、臨月まで町をうろつき回って食物をあさっていたにちがいない。いまじゃ「老いぼれ」――秀才の妻は秀才をそう呼んでいた――があれをもちあげるものだから、あれはいい気になって甘えてる。

「子どもは」と老婦人が、いつか台所で黄嫣にいった。「誰だって生むさ。わたしだって十カ月身ごもったものだが、あんなにつらいことがあるなんて信じられないやね。それに、生まれる子にしたって、まだ『閻魔さましかご存じない』さ。生まれてみたらひきがえるだったなんてことがないと、誰が保証できる。本物の『鳥』がほら穴からでて来るまではね。その時こそわたしの前で殿様風を吹かすがいい、ふんぞり返りゃいい。いまはまだ血だらけのみみずくさ。あんなに大騒ぎやらかすなんて、全く早すぎるというものだよ！」

その夜、若婦人は晩飯ぬきで、もうそのときは床に伏せっていたが、しつこい冷笑と嘲罵を耳にして、低い声でおいおいと泣きだした。秀才は着物を羽織ったまま寝床に腰を下ろしていたが、それを聞いて全身冷汗をかき、ブルッとからだをふるわした。着物を着直して老婦人のところへ行き、殴ってやろう、髪の毛をひっ掴んでぶちのめし、怒りをぶちまけてやろうと思った。だがどうしてか、力が抜けてしまい、指はふるえ腕もぐったりしてしまったようだった。そっとため息をついて、彼はいった。

「ああ、全くいままであれにやさしくし過ぎた。結婚後三十年、殴ったこともなければ、爪さえあれのからだに立てたことがなかった。だからこそ今日、女王さま然として、手もつけられないのだ」

つぶやきながら彼は寝床を向う側へはって行き、彼女の横から、彼女の耳にささやいた。

「泣くのはおやめ、泣くのは。勝手に吠えさせておけばいい！　あれは卵の産めなくなった雌鶏でな、他人が卵をかえすのを見て黙っておれんのだよ。今度おまえが本当に男の子を生んだら、わたしは二つ宝物をやろう――わたしは青玉の指輪と白玉の……」

しまいまでいわぬ先に、外で正妻がペチャクチャあざ笑う声を、彼は聞いていられなくなった。大いそぎで着物をぬぎ、頭をふとんのなかにつっこみ、彼女の胸もとにもぐりこませながら、いった。

「わたしは白玉の……」

腹は日一日と大きくなり、ますのようになった。ついに老婦人が産婆を雇った。しかもひとの前に花模様の布をもちだして、赤ん坊の着物を作った。

夏の炎熱が頂点に達し、旧暦六月が彼らの希望のまなざしのうちに過ぎ去った。秋に入って、涼風が村々を吹き抜けた。かくてある日、家じゅうの人びとの期待が絶頂に達し、屋内の空気は完全にかき回された。秀才の心はますます異常に緊

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com